

技 術 と 詩^{うた}



田 邊 忠 顯*

新年明けましておめでとうございます。いよいよ西暦2000年の幕開けです。

鳥 倦^うんで
春 漲^{みなぎ}るや 淀^{うた}の橋
(松瀬青々)

春の訪れとともに鳴き始めた百千鳥も春の深まりとともにようやく鳴くことに倦み橋の上にも春が漲^{みなぎ}っているとこの詩^{うた}について評者は言っています。これと同時に私は自然と一体になって風景を造っている淀^{うた}の橋に感慨を寄せている詩であると思えてなりません。構造美をうたったものではありませんが、このような詩^{うた}を作る余裕のある土木屋がもしこの橋を造ったとすれば、何かほのぼのとした気分が橋にまで感じられるのではないかと思います。

われわれ技術屋がこのような句を自ら作り、ほかの人の詩^{うた}を味わえるのであれば、技術が単なる技術でなく、より広く人間性に立脚したものとなり、文化の香りがより強く出てくると言えるのではないのでしょうか。

元来、武門の人間でも、商人でも、農民でも自分の仕事を俳句、短歌などの詩^{うた}に託して気持ちの昇華を図り、同時により高度な communication の手段にしてきたのは日本人独特の知恵で、それは広く知られていることです。そしてそれはまた、社会の大いなる潤滑油でもあったわけです。

自分が橋を架けた、道路を完成させたという感動は、ずいぶん深いものがあるはずですからそれを素直に、時々詩^{うた}に残し、工事史とかあるいは集合碑にして現場に残すような習慣をつけるとすれば、社会の人達に真に高度な communication を図ることになるような気もいたします。技術とヒューマ

ンな感情との融合です。すなわち、技術屋も詩心^{うた}を開拓して、自分の建設の感動をおおらかに表現する癖をつけたらどうかと思うのです。

このような詩^{うた}は、最近の「土木学会誌」によくあるような土木文明論よりも遥かに直接的にわれわれの仕事在市井の人に訴え、効果絶大なものがあるように思います。

冬の日や
墨田十橋 さかのぼり
一の橋
二の橋 ほたる ふぶきけり

(両句ともに黒田杏子)

橋をおいた冬の風情、夏の風情、まさに市井の人が共感を寄せる風景に違いありません。橋を造りかつ人々に提供してきた技術屋の心がこのようであれば、市井の人は土木屋あるいは土建屋と言って不審な目で見るものが少なくなるのは請け合いです。

21世紀は環境と文化の時代そして情報化の時代であるということは、疑いようがありません。凄まじいまでの情報化の流れが産業界はもちろんのこと、大学教育、社会の各種システムの中で進んでいます。が、われわれも敢然とこの流れの中に身を投じて流れを乗り切っていく必要があります。この情報化の流れの一方では、文化的、環境創造的な要求が一層強くなり、社会基盤整備に対して質的な高度化が求められています。

文化創造とか環境創造という要求は分かったようで、実はよく分からない要求なのです。とくに文化的に高品質という要求を現実に建設の業態、研究、

* Tadaaki TANABE: 本協会理事・会長, 名古屋大学工学部 教授

設計、施工の現場で生かそうとするときにどのような評価基準があるのか、何がその実態なのか、まずはっきりしていません。恐らく、このような問題について誰もが納得する答えがあるわけではなく、混乱を深めているのが現実のように思われます。しかし、答えがないというものの、重要なことは建設技術者がその問いを自らに向けて、自分の問題として常に考えて苦闘するという姿勢が大事なのではないかと思うわけです。

先に述べたような構造物に関連する詩は、人間の

心が昇華してこれらの問題に何らかのヒントを与えるはずで。われわれ、技術屋も先人の知恵を借りて、詩を詠む余裕をもち、あるいは詠まないまでもその風雅を愛する余裕をもち、この激動の世紀を乗り切っていきたいと考えます。

参 考 文 献

高橋睦郎：百人一句，中公新書，1999.1

黒田杏子：黒田杏子句集，一木一草，花神社，1998.5